

復活節第7主日(昇天後主日)

2020年5月24日

昇天、新しい関係の始まり



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

復活節第7主日(昇天後主日)

2020年5月24日

昇天、新しい関係の始まり

司祭 マリア・グレイス 笹森田鶴

今日は先週木曜日の昇天日の次の日曜日、昇天後主日、そして来週は聖霊降臨日となります。

不思議なことに、同じ著者だと言われているルカ福音書と使徒言行録には、キリストの昇天の記載が別の時間と場所で起こったようにそれぞれ残されています。

ルカ福音書では、墓が空であった日、エマオで二人の弟子に現れた日、そして弟子たちが集まっている只中に現れて手と足をお見せになり、焼いた魚を弟子たちの前で食べられた日、つまりご復活の日という設定です。そして場所は川向うのベタニア近辺です。

使徒言行録では、キリストのご復活から数えて40日目の日、場所はエルサレムとなっています。

同じ著者が、一方でキリストのご復活と昇天とを別々の場所ではあるものの、同じ時間の中で生じた出来事として、一方では同じ空間ではあるものの、時間軸を離して、それぞれ書き残しているのです。

現代人にとって矛盾に感じる記述です。けれども実は聖書には時々そのような記事を見受けることがあります。

皆さんよくご存知の旧約聖書の天地創造の物語も、二つの物語を単純に並行して置かれているのです。そのことによって、天地創造という壮大な神のご計画の最初の物語を、そのような記載によって出来事自

体の幅や神のお心の奥深さを一層際立たせています。

それと同じ様に、ルカ福音書と使徒言行録のふたつのキリストの昇天の記載は、別々の物語のようであり、そのような矛盾を越え、より大切なメッセージを伝えるために設定されていると考えられるのです。

その大切なメッセージとは、死を経てもなお新しい命に生きるキリストの時間と空間を越えた自由さであり、大胆さであり、希望であり、それによってキリストの命や働きがこの世だけのものではなく、天にも及ぶことを示すということです。時間と空間のずれは、かえって時間と空間を超える神の存在とお働きを強調しているのです。

そして主イエス様は、この世で人間として生きられたと同時に、神性をお持ちであることを、天に上げられていくお姿で弟子たちに示してくださいました。このお方はすぐれた人間存在なのではなく、神なのです。

復活という出来事は、主イエス様が地上の時空の限界からすでに解放されていることを示します。そして昇天という出来事は、主イエス様が新しい仕方でこの世界に神としてお働きになり、弟子たちはこれから新しい仕方でキリストとつながっていくように招かれていることを告げ知らせる出来事です。

ですから、主イエス様は弟子たちに「さよなら」もおっしゃいませんでした。ご自分のお話を終えた途端に天に上っていかれました。別れではなかったからです。新しい関係の始まりだったからです。

ルカ福音書ではこの出来事を素早く受け止めた弟子たちが主イエス様を神として礼拝し、大喜びでエルサレムに帰り、その後絶えず神をほめたたえていたと記されています。

一方使徒言行録では、受け止めきれず、理解しきれない弟子たちの姿が描かれています。どちらかという、後者の弟子たちの方がわたしは親近感を覚えます。

そして受け止めきれず、理解しきれないことを目の当たりにしたとしても、必ずその先を神は示してくださることが記されています。

キリストの昇天を目撃した弟子たちは、天を見つめていました。すると、不思議なことが起こります。復活の日、空の墓を見つめて途方にくれていた女性たちに輝く衣を着た二人が現れたように、キリストの昇天を目の当たりにした弟子たちにも白い服を着た二人の人が現れたのです。

この二人は、弟子たちに「なぜ天を見上げて立っているのか。…イエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」と告げ、この出来事は終わりのしるしなのではなく、新しい時の始まり、再び相まみえるゴールへの歩みだと伝えます。

途方に暮れてしまったとしても、神は必ずその先の道筋を示してくださるという約束をいただいたような出来事でした。

さらにキリストは、神の永遠、神の普遍、神の慈愛の中で存在されるお方として、イエスを主と告白する励ましの約束を弟子たちにお与えくださいました。そして聖霊を注ぎ、力づけ、次にお会いする時まで離れているようで常に共にいてくださることを可能にしてくださいました。

それを弟子たちが知るまでは、しばらくの時を経なければなりません。キリストは昇天によって一旦弟子たちから離れ、弟子たちは次に起こる聖霊降臨を待つこととなります。ちょうど今日の日曜日は、弟子たちにとってその中間の時となります。

わたしたち教会もこの中間の時に生きています。教会暦の時間軸でも、キリストの昇天から聖霊降臨日に至るこの期間を過ごしています。

またもっと長い時を、教会はこの中間の間の不安さを抱えながら、世界と切り離されることなく、ときどき天を見つめてしまいながらもキリストの再臨を待つて生きてきました。

それはコロナ以前とコロナ後の間に生きる今の不安さと同じようです。そして中間という時は先が見えないことによって、心が揺り動かされ、個人的にも共同体的にも不安定になり、対立や分断が生じる危機的状況に陥りやすくなります。また生きづらさが一層これまで生きるに困難な人びとを苦しみの中に追いやってしまう可能性をはらんでいます。

この時、すべての狭間や途上、また過程にわたしたちが教会共同体として生きていることを改めて思い巡らし、その時と場所のすべてにおいて時空を超えてキリストがともにいらっしゃること、わたしたちは時空を超えることができずとも時空を超えて働かれるキリストがわたしたちをどこにいてもつなげてくださること、わたしたちにはこの先のゴールが神によって与えられていること、そのゴールに向かうようにこの世において神の働きに参与するよう招かれていることを、心に刻みたいと願います。そしてこの中間の時を励まし合って歩みたいと願います。

教会は古い時代から昇天日から聖霊降臨日まで毎日祈り願う期間として定め、守ってきました。この度のカンタベリー大主教とヨーク大主教からの昇天日から聖霊降臨日の 11 日間の祈りの呼びかけ、「み国がきますように」(2016 年から開始された超教派ムーブメント)は、教会の古い習慣に則っていると言えます。

ことに今、不安の中で生きづらさを抱えている方、またそれが故に苦しんでいる方を覚え、この途上の世界にあって必要な働きを教会が行うために整えられますよう祈り求めていきましょう。